

「君死にたまふことなかれ」

与謝野晶子の春秋

秦 郁彦

第二回

● 「みだれ髪」のデビュー

与謝野晶子（本名は志よう）は明治一一（一八七八）年一二月七日、大阪府の堺市に生まれた。生家は目抜きの大通りで和菓子の製造と販売を営む駿河屋で、晶子は「二階だけが西洋づくりで、土でこしらへた時計が屋根の上にあつて、下には紺のれんの一杯吊つてある家で……練羊羹を重に売る菓子屋で、饅頭もこしらえて居りました」（「をさなき日」 明治四十二年）と回想している。

堺は千利休を始祖とする茶道の伝統を伝え、関連して銘菓で知られた和菓子屋も何軒かあったが、父の鳳宗七は市会議員に選出された街の有力者で、海外事情に関心があり、明治二一年のバルセロナ、翌年のパリ万博へ駿河屋の菓子を出展してメダルをもらっていた。

晶子は二十三歳で堺を離れたあと、戻り住むことはなかったが終

生、故郷の街を愛し懐かしんだ。

その想いを彼女は、

海こひし潮の遠鳴り数へつつ

少女となりし父母の家

と詠んでいる。

だが明治も半ばの日本では、若い女性が活動できる舞台は限られていた。ほとんどが小学校だけの学歴で、晶子のように新設されたばかりの女学校へ進学するのは少数だったが、卒業後の進路は結婚して良妻賢母の道をめざすしかなかった。

彼女の場合は商家なので、病弱の母に代って「店の帳場に座って帳付けをする」など、商売を差配していたが、明治三二年に若い男女の文学愛好者が集まる関西青年文学会に加入する。时期的には二歳下の籌三郎ちゆうざぶろうのほうが少し早く参加し、その手引きがあったのかも
しれない。

翌年には与謝野鉄幹が主宰する『明星』に投稿、鉄幹が西下した折の歌会で知り合い、交情を深めた。しかし鉄幹には妻と一児があり、苦しい恋となったが三四年六月、家出同然に上京して妻と別居中の鉄幹の下に走る。

不倫どころか旧民法では女性だけに適用される姦通罪に問われるリスクはあったのに、それを突破して、一〇月には鉄幹との結婚（入

籍は翌年一月）にこぎつける。

三百九十九首を収めた最初の歌集『みだれ髪』が、鉄幹の尽力で刊行されたのは二か月前の八月である。そのタイミングは絶妙だった。

不倫がらみの話題性もあって異論もなくはなかったが、大勢は「歌語の意識を根本からひっくり返す」（今野寿美）新しい言葉の姿に感動と称賛の声を惜しまず、大町桂月は晶子を「鬼才」と持ちあげた。

百年後の現在でも、高い評価は変わらない。たとえば比較文学者の芳賀徹は「日本詩歌史上おそらくはじめての、若い女の自己陶醉、青春自讃の歌にちがいはないが、それをこえてこれは日本女性の独立自尊を宣言する歌集であった」（芳賀『詩歌の森へ』、中公新書、二〇〇二年刊）と評している。私の好みになるが、『みだれ髪』から数首を抜きだしてみよう。

a くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪

 かつおもひみだれおもひみだるる

b その子二十櫛にながるる黒髪の

 おごりの春のうつくしきかな

c 清水へ祇園をよぎる桜月夜

 こよひ逢ふ人みなうつくしき

d 狂ひの子われに焰の翅かろき

百三十里あわただしの旅

注釈の必要はないと思うが、aは歌集の標題にちなんだ歌、bは乱れる前の黒髪にこめた想い、cは古今集の流れに沿った花鳥風月、そしてdは大阪から東京まで鉄幹を慕って百三十里の空を飛ぶ不倫宣言と、主題も手法も多彩をきわめるが、晶子のジャーナリストらしい感性もかいま見える。

なかでも突出した反響を呼んだのは、次の二首であろう。

やは肌の熱き血汐に触れもみで

寂しからずや道を説く君

春みじかし何に不滅の命ぞと

ちからある乳^ちを手^ちにさぐらせぬ

かねてから慎ましやかな良妻賢母の道を奉じていた「道学者先生たち」(晶子の自解)への痛烈な一矢だったろうが、晶子のスキヤンダルをめぐり不仲になっていった長兄の鳳秀太郎は、「私へのあてつけだ」と受けとめ激怒した。

六歳年長の兄は抜群の秀才で京都の第三高等学校を経て、東京帝国大学工科大学の電気工学科を首席で卒業して明治三〇年、二十五歳の若さで助教授に登用され、欧米留学を経て三九年には早くも教授に昇任している。理工系の学究らしい堅実で謹直な人柄だったが、俳句を作り画筆を握る一面もあった。それでも鉄幹の件でさからった晶子を許さず、生涯の義絶を申し渡す。

実際に三年後、父の宗七が他界したとき晶子は実家にかけてきたが、家長の秀太郎は葬儀の席に列するのを拒んだ。ちなみに秀太郎の息子（誠三郎）と孫（紘一郎）は、いずれも東大工学部の電気工学科を卒業して教授に就任している。祖父の講座を三代つづいて継承する稀な例になった。

●輜重輸卒で生還した弟

宗七の死で「旧家をほこるあるじ」には、早稲田大学文学部に学んでいた末っ子の籌三郎が中退して三代目を継ぎ、宗七の名を襲名することになった。温和な資質で晶子とは文学への趣好を共有する理解者でありつづけ、終生にわたり交流を切らさなかった。

その弟が三七年二月に開戦した日露戦争に召集されたのは、その年の六月である。所属は大阪第四師団の歩兵第八連隊で、四月に出発した第一陣は南満州の遼東半島に上陸し五月末、南山の激戦に勝

利して第二軍（他に第三、第六師団）に編入され遼陽へ向け北上した。

六月には旅順要塞を攻囲する乃木將軍のひきいる第三軍（第一、第九、第十一師団が基幹）が編成され、八月の第一回総攻撃に失敗、四カ月攻めあぐねての末、六万人の死傷者を出して陥落させた。

軍の動静は秘されていたが、晶子の日記の六月二十四日に「一週間ばかり前、広島から手紙が来た」ので、「宇品たちし弟、今日も浪の上をや」とあるところから、弟はこの頃に第八連隊の第二陣として満州へ向かったものと推察される。

その頃だろうか、晶子の耳に、籌三郎は旅順へ向かったらしいという噂が入った。少しおくれて弟が決死隊に志願したらしいという無根の噂も伝わったようだ。八月の総攻撃で東京第一師団に多数の死傷者が出たという情報は、いち早く東京の庶民の耳にも届いていたから、心おちつかぬ心情の晶子が、「旅順攻囲軍の中」にいたらしい弟の身を案じたのは、無理からぬものがあつた。

それに前年夏に結婚したばかりの「あえかに若き新妻」は、身重（八月に長女の夏子が出生）でもあつた。二歳足らずの長男（光）と半年にもならぬ次男（秀）をかかえていた晶子が身につまされたとしてもふしぎはない。

「君死にたまふことなかれ」を晶子が一気に詠みあげたのは、旅順

総攻撃が始まった三七年の八月半ば頃かと思われる。そして夫の鉄幹は「傑作だよ」と認め、九月一日発行の『明星』に掲載した。

反響は小さくなかった。なかでも国家主義者、戦争賛美者を自認する大町桂月は大手の雑誌『太陽』誌上で数回にわたり「家が大事也、妻が大事也、国は亡びてもよし、商人は戦うべき義務なしと言うは……世を害する思想也」「乱臣なり、賊子なり、国家の刑罰を加ふべき罪なり」と激しく論難した。

それに対し晶子は「この御評、一も二もなく服しかね候」と、一歩も退かず「歌は歌に候」「誠の心を歌にただけ」「少女と申す者、誰しも戦嫌いにて候」と反撃した。その一方では、日の丸の小旗で出征兵士を見送っているとか、幸徳らの社会主義者とは無縁だとさりげなく洩らすなど、「卑怯な利口者」と自嘲する知恵も働かせている。

このように理と情のすれちがいになってしまったので、晶子の詩は「情の声で……危険思想とは見るべからず」と擁護する論者も現れた。鉄幹と桂月の対論の場も設定されたが、物別れに終わる。

ではなぜ当局や軍部はこの論争に介入しなかったのか。桂月の「先年、内務省は『明星』の裸体画をとがめ発禁したのに、晶子の世を害する思想をなぜ……」のような文人の挑発に乗るのはいはためらいがあったろう。

高名な女流歌人の大塚楠緒子くすおこが論議のさなかに「お百度詣あゝ咎ありや」を發表し共感を呼んでいたが、戦場へ息子を送りだしたあと、お百度詣を重ねる母親たちと晶子は、悪意のない同質の心情と見なしたのかもしれない。

国民戦争の性格を帯びた日露戦争では、前線の兵士も銃後の民衆も戦意は旺盛だったが、旅順攻めで失敗を重ねた乃木将軍や、ロシア艦隊を追跡して取り逃がした上村提督かみむらの留守宅が投石されるなど、時に世論の批判が軍にきびしかった例もあり、当局もそれなりに気を使っていた。お百度詣もつでの母親たちの反感を買うのは、避けたかっただけに違いない。

話題を籌三郎の足跡に戻りたいが戦歴については、まぢまぢの断片的情報しか得られない。公的記録にあたる堺市兵事会編『堺市奉公録』（明治四〇年）によると、応召者一千五十人の中に「鳳宗七君」の名があり、戦後の明治三九年六月に戦死者八十五人の英霊を祀ったあと、一一月に生存者二百十五人への勲章伝達式が挙行されている。その第三回（一月二九日）に輜重輸卒しちようゆそつ六十一人の一人として、鳳宗七は勲八等白色桐葉章をもらった。

輜重輸卒は輜重兵の指揮下で、糧食等の補給物資を牛馬が曳く荷車や担送で前線に届ける任務で、「蝶々、とんぼ」と軽侮された最下級の兵士だが、戦闘には参加しないので戦死率は歩兵の一〇・八%

に対し〇・二%（大江志乃夫）と低かった。

主として体格不良者が集められたが、意外にも「大家の若旦那、僧侶、教員」など「箸より重いものを持ったことのない」人たちが混じっていたようだ。

籌三郎こと鳳宗七はまさにこのカテゴリーに属すが、幸運にも文筆の能力を認められ、司令部の書記役に抜擢されたい。病気で除隊したという風聞もあり、ひよつとして「死にたまふ」のは困るという軍の配慮が働いていた可能性も否定できない。

ともあれ無事に帰還した籌三郎は、老舗菓子店の主人として控え目だが平穏な日々を送り、晶子の死より二年後の昭和一九年に没した。堺中学の後輩である詩人の安西冬衛あんざいふゆゑは晩年の印象を「血色よく肥った町家の旦那」と語っているが、与謝野鉄幹は、次のような短歌を遺している。

塵上がる大道を見て店に在り

三十五年妻のおとうと

与謝野(藤)品子の一族

